

教科書に載せたい名作名文ハイライト

野菊の墓

伊藤左千夫

朗読 坪井祐実

出所 坪井祐実の「声の空間」

<http://www.voiceblog.jp/hana-sumire24/>

teabreak 編

野菊の墓

伊藤左千夫

●冒頭部分

後の月という時分が来ると、どうも思わずにはいられない。幼い訳とは思うが何分にも忘れることができない。もはや十年余も過去った昔のことであるから、細かい事実は多くは覚えていないけれど、心持だけは今なお昨日のごとく、その時の事を考えてると、全く当時の心持に立ち返って、涙が留めどなく湧くのである。悲しくもあり楽しくもありというような状態で、忘れようと思うこともないではないが、むしろ繰返し繰返し考えては、夢幻的の興味を貪っている事が多い。そんな訳からちよっと物に書いて置こうかという気になったのである。

●山畑に綿を採りに行く場面

村のものらもかれこれいうと聞いているので、二人揃うてゆくも人前恥かしく、急いで村を通抜けようとの考えから、僕は一足先になって出掛ける。村はずれの坂の降口の大きな銀杏の樹の根で民子のくるのを待った。ここから見おろすと少しの田圃がある。色よく黄ばんだ晩稲に露をおんで、シットリと打伏した光景は、気のせいか殊に清々しく、胸のすくような眺めである。民子はいつの間にか来ていて、昨日の雨で洗い流した赤土の上に、二葉三葉銀杏の葉の落ちるのを拾っている。

民さん、もうきたかい。この天気の良いことどうです。ほんとに心持のよい朝だねい」

ほんとに天気がよくて嬉しいわ。このまア银杏の葉の綺麗なこと。さア出掛けましよう」

民子の美しい手で持っていると银杏の葉も殊に綺麗に見える。二人は坂を降りてようやく窮屈な場所から広場へ出た気になった。今日は大いそぎで棉を採り片付け、さんざん面白いことをして遊ぼうなどと相談しながら歩く。道の真中は乾いているが、両側の田についている所は、露にしとしとに濡れて、いろいろの草が花を開いてる。タウコギは末枯れて、水蕎麦蓼など一番多く繁っている。都草も黄色く花が見える。野菊がよろよろと咲いている。民さんこれ野菊がと僕は吾知らず足を留めたけれど、民子は聞えないのかさっさと先へゆく。僕は一寸脇へ物を置いて、野菊の花を一握り採った。

民子は一町ほど先へ行ってから、気がついて振り返るや否や、あれツと叫んで駆け戻ってきた。

民さんはそんなに戻ってきかないツたって僕が行くものを……」

まア政夫さんは何をしていたの。私びツくりして……まア綺麗な野菊、政夫さん、私に半分おくれツたら、私ほんとうに野菊が好き」

僕はもとから野菊がだい好き。民さんも野菊が好き……」

私なんでも野菊の生れ返りよ。野菊の花を見ると身振いの出るほど好ましいの。どうしてこんなかと、自分でも思う位」

民さんはそんなに野菊が好き……道理でどうやら民さんは野菊のような人だ」

民子は分けてやった半分の野菊を顔に押しあてて嬉しがった。二人は歩きだす。

政夫さん……私野菊の様だってどうしてですか」

さアどうしてということはないけど、民さんは何がなし野菊の様な風だからさ」
それで政夫さんは野菊が好きだって……」

僕大好きさ」

民子はこれからはあなたが先になってと云いながら、自らは後になった。今の偶然に起った簡単な問答は、お互の胸に強く有意味に感じた。民子もそう思った事はその素振りで解る。ここまで話が迫ると、もうその先を言い出すことは出来ない。話は一寸途切れてしまった。

何と言っても若い兩人は、今罪の神に翻弄せられつつあるのであれど、野菊の様な人と云った詞について、その野菊を僕はだい好きだと云った時すら、僕は既に胸に動悸を起した位で、直ぐにそれ以上を言い出すほどに、まだまだずうずうしくはなっていない。民子も同じこと、物に突きあたった様な心持で強くお互に感じた時に声はつまってしまったのだ。二人はしばらく無言で歩く。

真に民子は野菊の様な児であった。民子は全くの田舎風ではあったが、決して粗野ではなかった。可憐で優しくてそうして品格もあった。厭味とか憎気とかいう所は爪の垢ほどもなかった。どう見ても野菊の風だった。

しばらくは黙っていたけれど、いつまで話もしないでいるはなおおかしい様に思っ、無理と話を考え出す。

民さんはさっき何を考えてあんなに脇見もしないで歩いていたの」

わたし何も考えていやしません」

民さんはそりや嘘だよ。何か考えごとでもしなくてあんな風をする訣はないさ。どんなことを考えていたのか知らないけれど、隠さないだってよいじゃないか」

政夫さん、済まない。私さっきほんとに考事していました。私つくづく考えて情なくなつたの。わたしはどうして政夫さんよか年が多いんでしょう。私は十七だと言うんだもの、ほんとに情なくなるわ……」

民さんは何のこと言うんだろう。先に生れたから年が多い、十七年育つたから十七になつたのじゃないか。十七だから何で情ないのですか。僕だって、さ来年になれば十七歳さ。民さんはほんとに妙なことを云う人だ」

僕も今民子が言ったことの心を解せぬほど児供でもない。解つてはいるけど、わざと戯れの様に聞きなして、振りかえつて見ると、民子は真に考え込んでいる様であつたが、僕と顔合せて極りわるげににわかにも側を向いた。

●亡くなつた民子の実家を尋ねる場面

政夫さん、民子の事については、私共一同誠に申訣がなく、あなたに合せる顔はないのです。あなたに色々御無念な処もありましようけれど、どうぞ政夫さん、過ぎ去つた事と諦めて、御勘弁を願います。あなたにお詫びをするのが何より民子の供養になるのです」

僕はただもう胸一ぱいで何も言うことが出来ない。お祖母さんは話を続ける。

実はと申すと、あなたのお母さん始め、私また民子の両親とも、あなたと民子がそれほど深い間であつたとは知らなかつたもんですから」

僕はここで一言いいだす。

民さんと私と深い間とおっしゃっても、民さんと私とはどうもしやしません」

「いえ、あなたと民子がどうしたと申すではないのです。もとからあなたと民子は非常な仲好しでしたから、それが判らなかつたんです。それに民子はあの通りの内気な児でしたから、あなたの事は一言も口に出さない。それはまるきり知らなかつたとは申されません。それですからお詫びを申す様な訣……」

僕は皆さんにそんなにお詫びを云われる訣はないという。民子のお父さんはお詫びを言わしてくれという。

そりや政夫さんのというのは御もつともです、私共が勝手なことをして、勝手なことをお前さんに言うというものですが、政夫さん聞いて下さい、理窟の上のことではないです。男親の口からこんなことをいうも如何ですが、民子は命に替えられない思いを捨てて両親の希望に従ったのです。親のいいつけで背かれないと思つても、道理で感情を抑えるは無理な処もありましょう。民子の死は全くそれ故ですから、親の身になって見ると、どうも残念でありまして、どうもしやしませんと政夫さんが言う通り、お前さん等二人に何の罪もないだけ、親の目からは不憫が一層でな。あの通り温和しかつた民子は、自分の死ぬのは心柄とあきらめてか、ついぞ一度不足らしい風も見せなかつたです。それやこれやを思いますとな、どう考えてもちと親が無慈悲であつた様で……。政夫さん、察して下さい。見る通り家中がもう、悲しみの闇に鎖されて居るのです。愚かなことでしょうか、この場合お前さんに民子の話を聞いて貰うのが何よりの慰藉に思われますから、

年がいもないこと申す様だが、どうぞ聞いて下さい」

お祖母さんがまた話を続ける。結婚の話からいよいよむずかしくなったまでの話は嫁が家での話と同じで、今はという日の話はこうであった。

六月十七日の午後に医者が出て、もう一日二日の処だから、親類などに知らせるならば今日中にも知らせるがよいと言いますから、それではとて取敢ずあなたのお母さんに告げると十八日の朝飛んできました。その日は民子は顔色がよく、はっきりと話も致しました。あなたのおっかさんがきまして、民や、決して気を弱くしてはならないよ、どうしても今一度なおる気になっておくれよ、民や……民子にはっこり笑顔さえ見せて、矢切のお母さん、いろいろ有難う御座います。

長長可愛がって頂いた御恩は死んでも忘れません。私も、もう長いことはありません。すまい……。民や、そんな気の弱いことを思っではいけない。決してそんなことはないから、しっかりしなくてはいけないと、あなたのお母さんが云いましたら、民子はしばらくたって、矢切のお母さん、私は死ぬが本望であります、死ねばそれでよいのです……。といいましてからなお口の内では何か言った様で、何でも、政夫さん、あなたの事を言ったに違いないですが、よく聞きとれませんでした。それきり口はきかないで、その夜の明方に息を引取りました……。それから政夫さん、こういう訣です……。夜が明けてから、枕を直させます時、あれの母が見つけていました、民子は左の手に紅絹の切れに包んだ小さな物を握ってその手を胸へ乗せているのです。それで家中の人が皆集ってそれをどうしようかと相談しましたが、可哀相なような気持もするけれど、見ずに置くのも気にかかる、とにかく聞いて

見るがよいと、あれの父が言い出しまして、皆の居る中であけました。それが政さん、あなたの写真とあなたのお手紙でありまして……」

お祖母さんが、泣き出して、そこにいた人皆涙を拭いている。僕は一心に畳を見つめていた。やがてお祖母さんがようよう話を次ぐ。

そのお手紙をお富が読みましたから、誰も彼も一度に声を立って泣きました。あれの父は男ながら大声して泣くのです。あなたのお母さんは、気がふれはしないかと思うほど、口説いて泣く。お前達二人がこれほどの語らいとは知らずに、無理無体に勧めて嫁にやったは悪かった。ああ悪いことをした、不憫だった。民や、堪忍して、私は悪かったから堪忍してくれ。俄の騒ぎですから、近隣の人達が、どうしましたと云って尋ねにきました。それであなたのお母さんはどうしても泣き止まいません。体に障ってはお思ひまして葬式が済むと車で御送り申した次第です。身を諦めた民子の心持が、こう判って見ると、誰も彼も同じことで今更の様に無理に嫁にやった事が後悔され、たまらないですよ。考えれば考えるほどあの児が可哀相で可哀相で居ても起っても居られない……せめてあなたに来て頂いて、皆が悪かったことを十分あなたにお詫びをし、またあれの墓にも香花（こうげ）をあなたの手から手向けて頂いたら、少しは家中の心持も休まるかと思ひまして……今日のことをなんぼう待ちましたろ。政夫さん、どうぞ聞き分けて下さい。ねい民子はあなたにはそむいては居ません。どうぞ不憫と思つてやっして下さい……」

一語一句皆涙で、僕も一時泣きふしてしまった。民子は死ぬのが本望だと云っ

たか、そういったか……家の母があんなに身を責めて泣かれるのも、その筈であった。僕は、

お祖母さん、よく判りました。私は民さんの心持はよく知っています。去年の春、民さんが嫁にゆかれたと聞いた時でさえ、私は民さんを毛ほども疑わなかったですもの。どの様なことがあるうとも、私が民さんを思う心持は変わりません。家の母などもただそればかり言って嘆いて居ますが、それも皆悪気があっての業でないのですから、私は勿論民さんだって決して恨みに思やしません。何もかも定まった縁と諦めます。私は当分毎日お墓へ参ります……」

話しては泣き泣いては話し、甲一語乙一語いくら泣いても果てしが無い。僕は母のことも気にかかるので、もうお昼だという時分に戸村の家を辞した。戸村のお母さんは、民子の墓の前で僕の素振りが余り痛わしかったから、途中が心配になると、自分で矢切の入口まで送ってきてくれた。民子の愀然なことはいくら思うても思いきれない。いくら泣いても泣ききれない。しかしながらまた目の前の母が、悔悟の念に攻められ、自ら大罪を犯したと信じて嘆いている愀然さを見ると、僕はどうしても今は民子を泣いては居られない。僕がめそめそして居るだけでは、母の苦しみは増すばかりと気がついた。それから一心に自分で自分を励まし、元気をよそおうてひたすら母を慰める工夫をした。それでも心にない事は仕方のないもの、母はいっしかそれと気がついてる様子、そうなっっては僕が家に居ないより外はない。

毎日七日の間市川へ通って、民子の墓の周囲には野菊が一面に植えられた。そ

の翌くる日に僕は十分母の精神の休まる様に自分の心持を話して、決然学校へ出た。

*

*

*

民子は余儀なき結婚をして遂に世を去り、僕は余儀なき結婚をして長らえていく。民子は僕の写真と僕の手紙とを胸を離さずに持って居よう。幽明遙けく隔つとも僕の心は一日も民子の上を去らぬ。